平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

1995年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査は、平城宮跡６件、平城京跡11件、京内寺院・その他６件である。以下に主要な調査の概要を報告する。

1　平城宮跡の調査

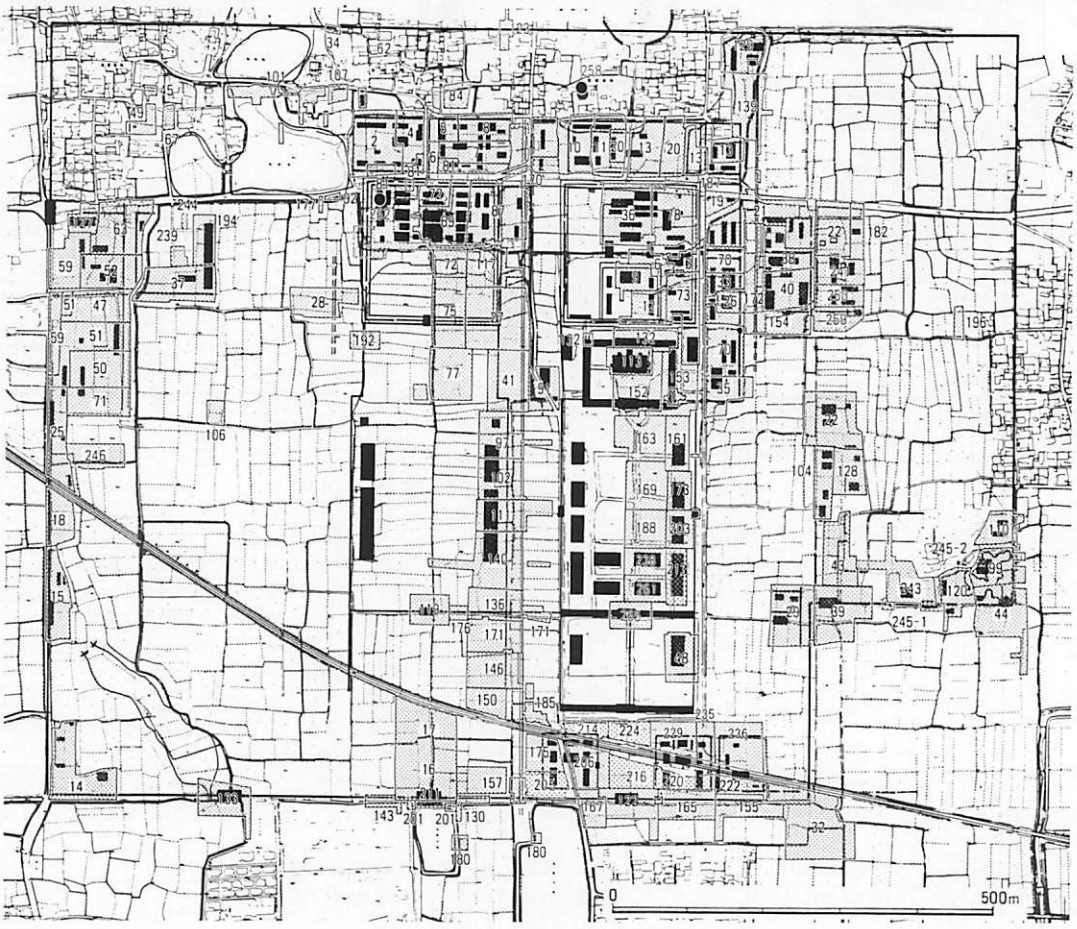
造酒司地区の調査（第250・259次）

駐車場造成に伴う事前調査。調査区は、第241次調査区の南、第154次調査区の東にあたり、造酒司の南西部、その南方の宮内道路・道路側溝等が存在すると推定されていた。調査はこれらの様相の解明を目的として行った。調査の結果、掘立柱建物15棟、門２棟、築地塀２条、掘立柱塀９条、溝14条、足場穴列１条、道路１条、土坑２基、小穴多数を検出した。

造酒司　遺構の配置、切り合い関係、整地土から遺構の次のような変遷を識別できる。

Ａ期（奈良時代前半）　Ⅰ期・Ⅱ期に細分される。ＡⅠ期：南・西を築地塀SA16702・15814で区画、南面築地には棟門SB16700を開いて南門とする。敷地西部に井戸からの排水路SD3035を設け、木樋による暗渠で敷地外へ排水する。棟門の北西に大型東西棟建物SB16726を置き、その南に雑舎群SB16712・16714・16717・16723・16716を配する。ＡⅡ期：門・築地塀・主要建物に変化はない。敷地北部での井戸の増設に伴い、排水路SD15818を新設する。敷地南部の雑舎群は、南北棟SB16713・16718・16722に建て替える。

Ｂ期（奈良時代後半）　南門を礎石建ちの八脚門SB16701に変える。この際、前身のSB16700よりも心

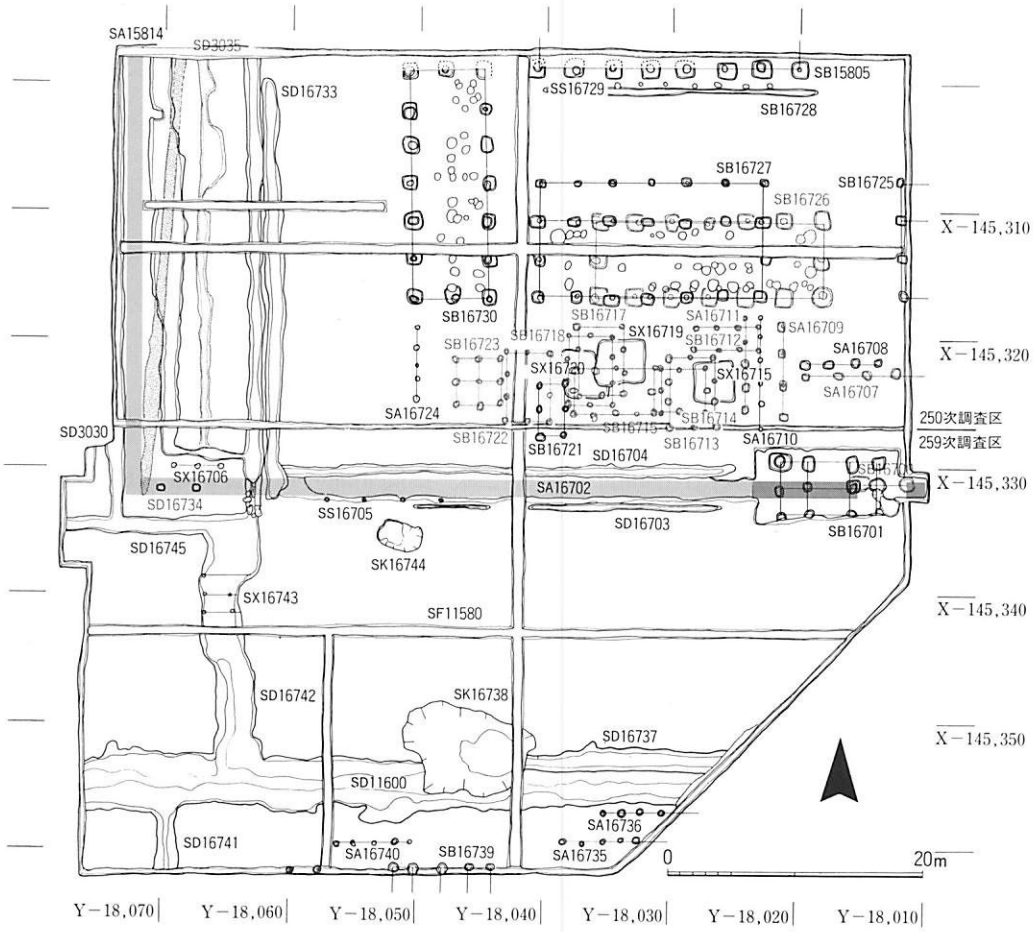


1995年度　平城宮発掘調査位置図　1：10000

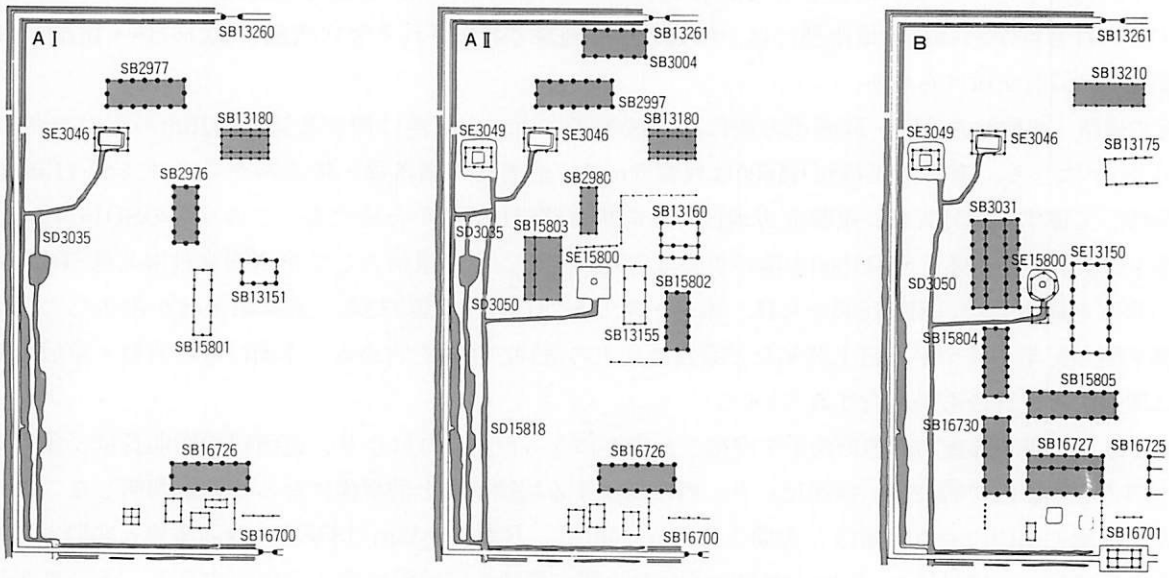
をやや西にずらす。大型建物を南北棟SB16730、東西棟SB15805、北庇付東西棟SB16727に増・改築する。雑舎群があった敷地南部には、種麹の保存施設と想定される竪穴状施設SX16715・16720、南北棟SB16721が設けられる。

宮内道路・東院北方地区　造酒司の南には、法華寺方面から東西に伸びる道幅約15mの宮内道路SF11580がはしる。道路南側溝SD11600は残幅５mで、造酒司の雨落溝・排水路からの水をSF11580を横断して流す溝SD16742、東院北方地区からの排水路SD16741が合流する。このうちのSD16742には橋SX16743がかかる。SD11600の南の東院北方地区では、主な遺構として東西両庇付南北棟SB10739の北妻を検出した。SD11600からは、木簡・削り屑2812点、木器233点、土器類多数が出土した。延暦年間の紀年木簡や平城宮土器Ｖなど奈良時代末の遺物が多数を占める。木簡には春宮坊・皇后宮職に関連する一群のものが含まれていた。

まとめ　今回の調査で造酒司西半を完掘したことになった。これにより、造酒司の南北長は、北門・南門の心々距離で約125m（420尺）と、西に隣接する塼積官衙と同規模になることが判明した。また、西面築地と南門の心々距離は、Ａ期：約59m（200尺）、Ｂ期：約55m（185尺）、西面築地と北門の心々距離は約51m（170尺）であり、南北いずれかの門が敷地の中軸線に乗ると仮定すると、その東西長も約100mを超える規模であったと推定できることになった。明らかになった造酒司西半の遺構についてみると、全体として建物の増加と建物規模の拡大という変遷傾向がみられる。建物の多くは酒甕の据え付け穴を持っており、この傾向は造酒司における生産体制の整備・拡大を反映していると考えられる。南門が棟門から八脚門に格上げして建て替えられるのもこの傾向と連動するものだろう。さらに、他の官衙のような正殿を中心とする整然とした建物配置をみせず、空閑地が多い点も特徴的で



平城宮第250・259次調査遺構平面図　1：600



造酒司遺構変遷図　網目は酒甕を伴う建物

ある。造酒司がもつ酒の製造・管理機能やそれに必要な作業場の確保といったことと関連すると考えられる。

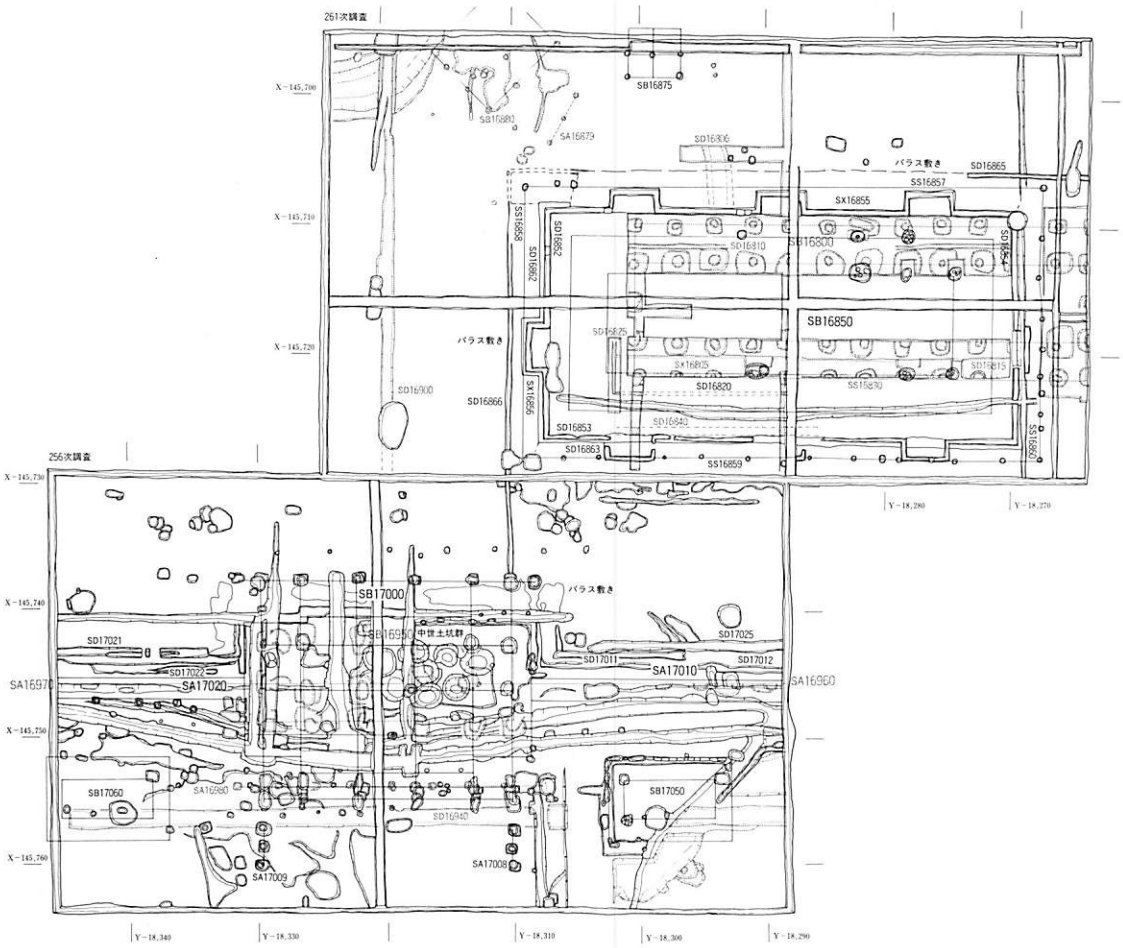
このほか、宮内道路南側溝から出土した木簡群には、奈良時代末頃の春宮坊・皇后宮職関連の木簡がまとまって含まれており、近辺にこうした機関が存在していた可能性を示している。

東区朝堂院の調査（第261・265次調査）

今回の一連の調査は、東第六堂（第261次調査）と南門および朝堂院南限施設（第265次）の様相を解明するとともに、過去の調査結果からの想定を確認することにあった。第261次調査では、奈良時代の遺構として、奈良時代前半・後半の第六堂各１棟、地覆石据付溝・抜取溝・足場穴５条、地割り溝１条、掘立柱建物１棟、礫敷の舗装３ヶ所、暗渠２条、土坑数基、古墳時代の遺構として、掘立柱建物１棟、掘立柱塀１条、溝４条、土坑３基、円墳周溝１条がそれぞれ検出された。第265次調査では、奈良時代の遺構として、奈良時代前半・後半の朝堂院南門各１棟・朝堂南限施設としての塀各２条・雨落溝６条、基壇建物１棟、掘立柱塀１条、立柱列２条、溝１条を検出したほか、古墳時代の溝１条、中・近世の土坑群も発掘した。

第六堂　遺構の切り合い、上下２層の整地土層で識別される奈良時代前半・後半の遺構変遷がある。

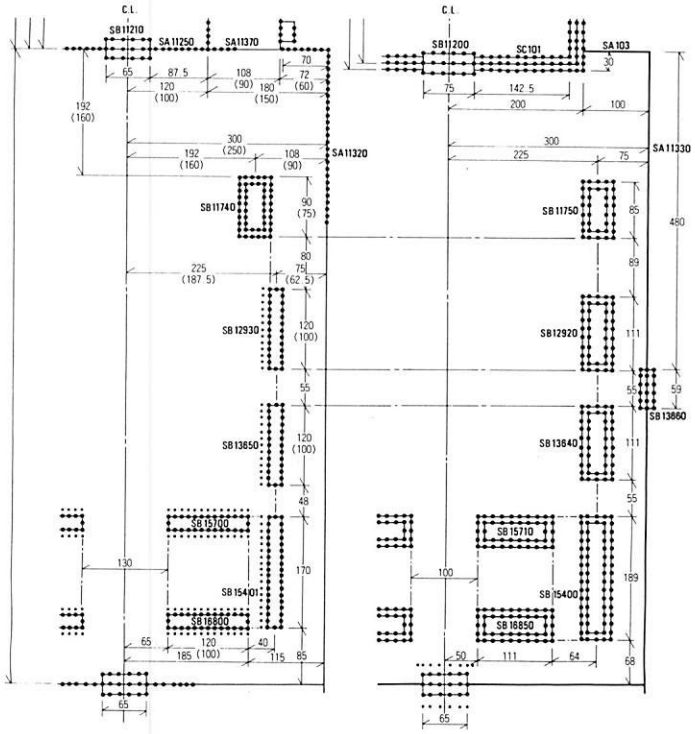
奈良時代前半　東第六堂下層建物SB16800は、桁行12間、梁間４間の南北庇付掘立柱東西棟建物。柱間は桁行・梁間ともに10尺等間で、全長は桁行120尺、梁間40尺となる。この規模・構造は、東第五堂下層建物SB15700と等しい。身舎には最大残高20cmの基壇があるが、庇部には無く、南庇部では礫敷きの舗装SX16805がみられる。配置は、東西の妻をSB15700の東西の妻に、南入側柱を東第四堂の下層建物SB15041の南妻柱にそれぞれ揃える。SB15700との間隔は110尺、SB15041とは20尺である。柱穴の断ち割り調査で、身舎部の柱穴が庇の柱穴より古いことが判明した。また、庇にともなう雨落溝SD16825に身舎周縁をめぐる溝SD16810・16815が切られるが、この２条の溝はその位置から身舎にともなう雨落溝と考えられる。これらから、東第二堂～第六堂にみられる庇の付加は建設時の工程差でなく、当初身舎だけであった建物に庇を増設したという時期差であることが確定した。さらに、平城宮土器Ⅰの須恵器が柱穴掘形・下層整地土から、藤原宮式軒平瓦6561Ａが下層整地土から出土し、下層朝堂の建設時期が平城宮遷都時まで遡ることが明確になった。



平城宮第261・265次調査遺構平面図　1：600

このほかの主な遺構としては、調査区西部で検出した第二次朝堂院の南北中軸線上に乗る南北溝SD16900がある。これはその位置と人工的に埋められた状況、土層観察の結果から、平城宮造営時の朝堂院建設に用いられた計画線を示す地割り溝と考えられる。

奈良時代後半　東第六堂上層建物SB16850は東西37.1m、南北17.1mの基壇をもつ、桁行９間、梁間４間の四面庇付き礎石建東西棟建物。柱間は身舎が桁行・梁間ともに13尺等間、庇部分が10尺、全長は桁行111尺、梁間46尺となる。配置では、第五堂SB15719との関係は下層と同じだが、第四堂SB15400の南妻に南側柱を揃えるようになる。SB16850は保存状態が悪く、以上の推定は、わずかに残された



第２次朝堂院地域の建物配置図（左：下層、右：上層）

柱穴や基壇の地覆石の抜取溝SD16851～16854および据付溝SD16861～16864や第五堂上層建物SB15710との比較による。また、SB15710と同様、南・北面に３ヶ所、東・西面に１ヶ所づつ５尺の出の階段が付くが、東・西面のものはSB15710とは異なり、梁間４間のうち南から２間目に付いている。基壇周辺での出土軒瓦の組合せは、6225Ｃ-6663Ｃを主体とする。このほか、基壇周辺で礫・小砂利による舗装SX16855・16856、足場穴ＳＳ16857～16860などを検出。

南門・南限区画施設　遺構の切り合い、３層の整地土層で識別される次のような遺構変遷がある。

奈良時代前半　下層南門SB16950の東西に朝堂院南限を画する掘立柱東西塀SA16960・16970が取り付く。この東区朝堂院の南限は中央区朝堂院南限と揃い、東区朝堂院の南北長は960小尺（800大尺）と確定した。SB16950は桁行５間、梁間２間の掘立柱東西棟総柱建物。高さ約70㎝の基壇をもつ。柱間は桁行が両端の間10尺、中央３間15尺、梁間が10尺等間である。SA16960・16970は掘立柱を立てた後、高さ約50㎝、北半で出が約１mの基壇を造成したものである。柱間はSB16950の妻柱からSA16970が西へ11.5尺・11.5尺・15尺・10尺、SA16960が東へ39尺（12尺・12尺・15尺？）・9.5尺・9.5尺・9.5尺と不揃いであるが、東西の柱間15尺の部分には脇門が開いていた可能性がある。塀心から北へ1.5mの位置には北雨落溝SD16965・16975の溝心がくる。SD16965・16975は幅約80㎝。南門の南側柱の南15尺の位置には、南門南面の閉塞施設と考えられる柱間10尺等間の東西塀SA16980がある。このほか、朝堂院北端には平城宮造営当初の整地直後に開鑿され、短期間で埋め戻された東西溝SD16940がはしる。

奈良時代後半　基本的な遺構配置は前段階と同じで、上層南門SB17000に築地塀SA17010・17020が取り付く。SB17000は桁行５間、梁間２間の礎石建身舎の南北に土庇が付いた建物。東西22.3m、南北10.7mで南北６尺・東西５尺の出をもつ凝灰岩壇正積基壇上に建つ。北庇は17尺の軒の出で東西両端に庇の隅の軒先の垂れ下がりを防ぐ支柱が付く。北庇の建設と同時に施工されたバラス舗装がSA17020の北雨落溝SD17021を覆うことから、北庇はSB17000建設当初には無く、後に付加されたものであることがわかる。南庇は軒の出を14尺から17尺へと改装される。SA17010・17020は築地基底幅６尺である。築地塀北雨落溝は当初、溝心が築地基底北端から約６尺の位置にあるSD17011・17021であったが、南門に北庇が付く時期に、これより約１m南のSD17012・17022に替えられる。南門や塀付近で出土した軒瓦は6311Ａ・Ｂ-6664Ｄ・Ｆの組合せのものが主体を占める。南門南土庇の南には門の両妻の真南の位置に、儀式用の旗竿を立てた穴と考えられる柱間５尺の東西柱穴列SA17008・17009が相対している。さらに、南の朝集院内には、南門の東西両脇の20尺離れた位置に基壇北端の線を南門基壇のそれにそろえる基壇建物SB17050・17060が建てられている。SB17050・17060は同規模で、保存状態のよいSB17050では凝灰岩の地覆石をもつ東西約9.6m、南北約6.6mの基壇に掘立柱・礎石併用の桁行３間程度、梁間１間で柱間が桁行８尺、梁間10尺の東西棟建物が建ち、屋根には6225Ａ・Ｃ-6721の組合せの軒瓦が葺かれていたと想定できる。

まとめ　本年度の調査で、東区朝堂院の東半の主要建物の調査がほぼ終了した。過去の調査結果に今回の結果を加えて復元した東区大極殿院・朝堂院の建物配置を図に示す。細部では第六堂・南門の構造や変遷を詳細に把握するにいたった。特に、第六堂下層建物については、平城宮の建物に関して重要な一例を提供したばかりでなく、議論があった朝堂院下層建物の構造や庇の増設時期をめぐる問題を解決することができた。また、第261次調査で検出した朝堂院建設時の地割り溝や第265次調査で検出した奈良時代後半の朝堂院南門南面の左右に建てられた基壇建物など新たな知見を得た。その一方、上層の建物では、朝堂とその周囲の区画施設とでは葺かれていた瓦が違うことが再確認された。これにより、上層の朝堂と区画施設間で建設時期が異なる可能性も出てきており、新たな検討が必要となった。

（加藤真二）

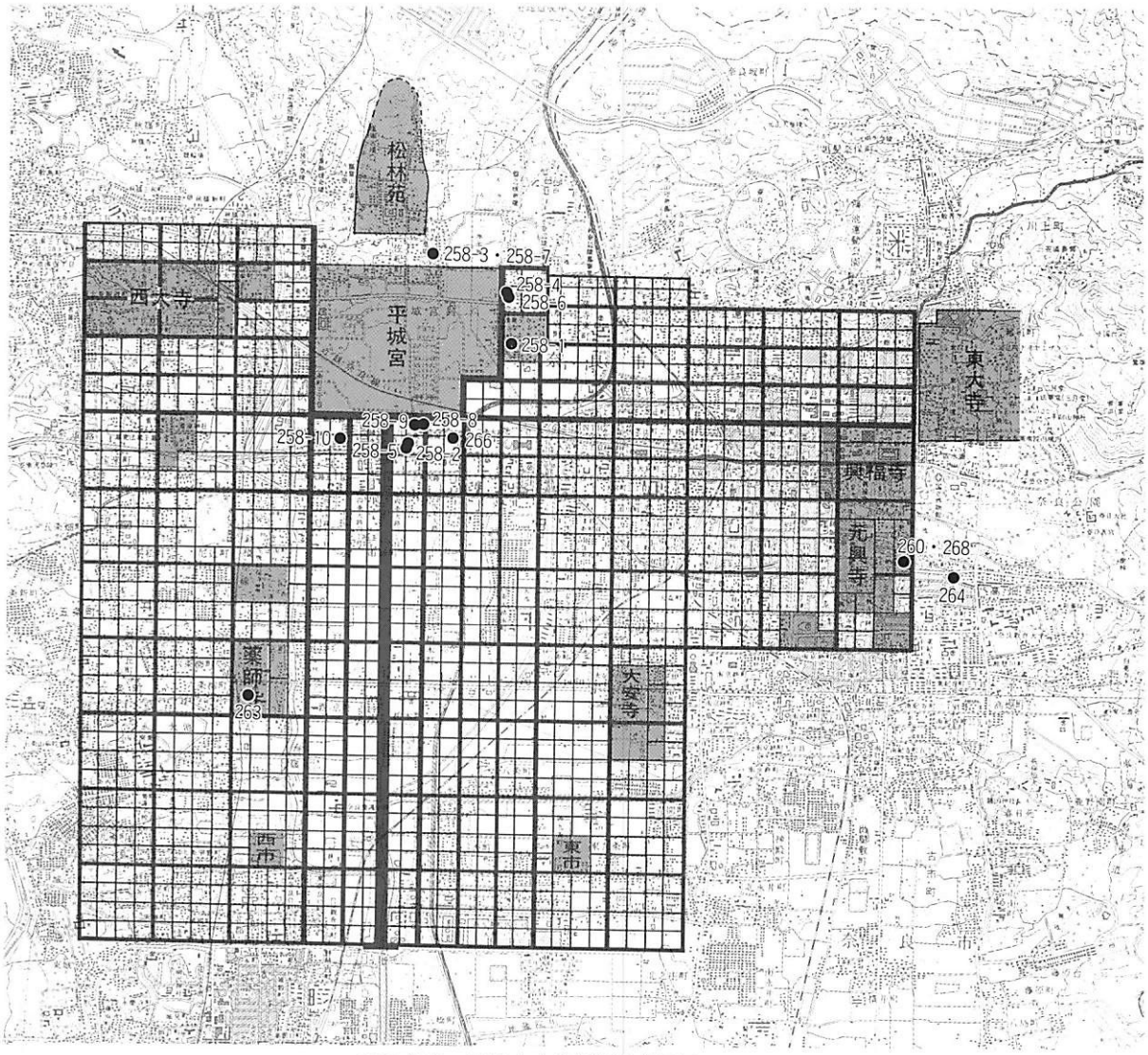
2　平城京跡の調査

平城京跡では、左京域の一条二坊十坪、三条一坊七坪・八坪・十五坪、右京域の三条一坊十坪などで発掘調査を行った。このうち主な調査について報告する。

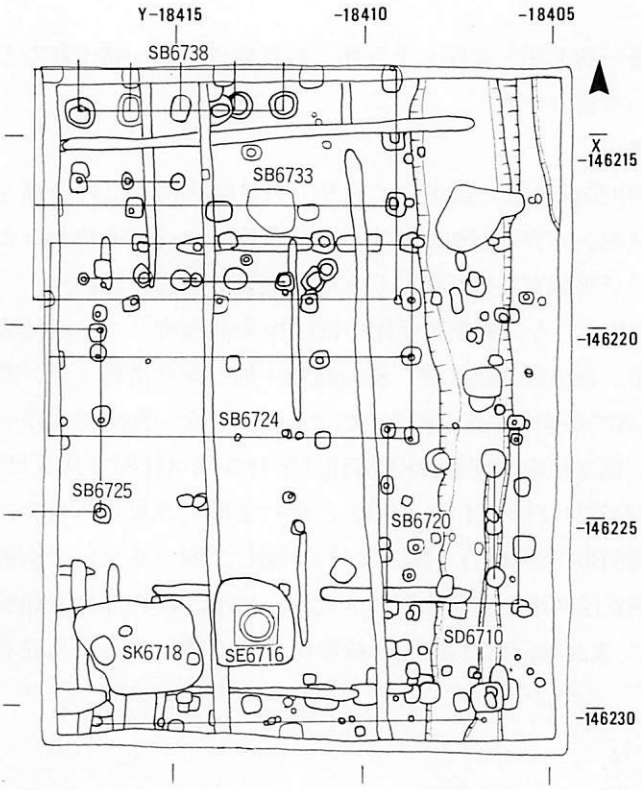
左京三条一坊七坪の調査（第258-２・258-５次）

左京三条一坊七坪は、先に第231次調査で坪中央部を広く調査しており、奈良時代後半に坪全体を一区画としたことが知られる。遺構・遺物の状況から宮外官衙が想定され、京内での位置や史料との対比により大学寮が推測されている坪である。（『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993）。

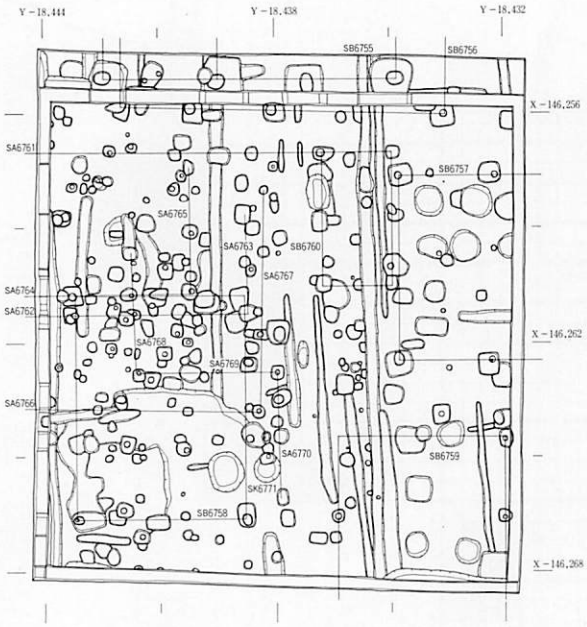
第258-２次調査　駐車場造成に伴う事前発掘調査である。調査区は坪のほぼ中央部西寄りで、現地表下約30cmで遺構を検出した。主な遺構は溝１条、掘立柱建物４棟、礎石建物１棟、塀状遺構４条、井戸１基などである。南北溝SD6710は調査区北端で幅約2.5m、南端で約２m、深さ５～20cmで北ほど深く、古墳時代・奈良時代前半の土器を含む。掘立柱南北棟建物SB6720は桁行３間（柱間寸法５尺）、梁行２間（６尺）である。掘立柱東西棟建物SB6724は桁行４間（８尺）、梁行２間（５尺）の身舎に南廂がつく（廂の出７尺）。掘立柱東西棟建物SB6733も桁行４間（８尺）、梁行２間（６尺）で南廂がつく（廂の出８尺）。掘立柱建物SB6725は調査区西端で南北２間（８尺）を検出、西へ伸びる建物であろう。調査区北端で東西４間分を検出した東西棟SB6738は柱の抜取が大きく浅いことから礎石



1995年度　平城京内発掘調査位置図　1：50000



平城京第258-2次調査遺構平面図　1：200



平城京第258-5次調査遺構平面図　1：200

の抜取と判断した。礎石据付掘形は径70cm程度、柱間は4.5尺と小さく倉庫と考えられる。これらの建物は平面規模・柱穴とも小さく、第231次調査の知見と共通する。

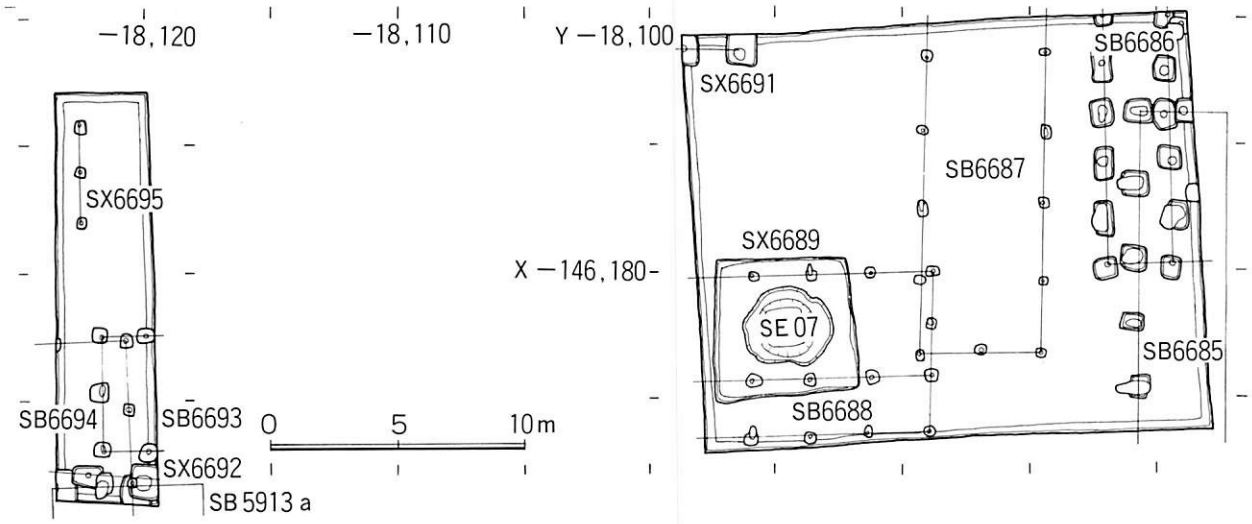
第258-5次調査　ガソリンスタンド建設に伴う事前発掘調査で調査区は坪の西南隅に近い。水田耕土・床土の下は自然堆積層で、その上面で遺構を検出した。主な遺構は掘立柱建物6棟、掘立柱塀9条などである。

調査区の北端で南妻を検出した掘立柱南北棟建物SB6755は梁行2間（8尺）で、坪の中心とは反対の側に西廂（出10尺）がつくことが注目される。SB6756は東西4間分の柱穴を確認、これを南側柱とする東西棟建物であろう。調査区東端の東西棟建物SB6757は西妻から1間分を検出（桁行・梁行とも8尺）。SB6758は調査区南西部の南北棟建物で桁行3間（7尺）、梁行2間（7尺）である。SB6759は調査区東南隅の南北棟建物で梁行2間（7尺）、桁行1間分（7尺）を検出。調査区東北部の南北棟建物SB6760は桁行2間（6尺）、梁行1間（6尺）で、北妻に東西塀SA6761が取り付く。またL字形に接続する東西・南北塀が4組ある。SA6762～SA6763、SA6764～SA6765、SA6766～SA6767、SA6768～SA6769～SA6770である。小規模な目隠し塀だが狭い範囲で作り替えている。大規模建物が少なく、建物密度が低いとされる坪であるが、この部分では比較的大型の建物を含めて、建物がかなり密に存在している。坪の西南隅に近いことと合わせて、坪内の利用形態を検討する必要があるだろう。土坑SK6771出土の土馬2点は、ほぼ同形同大で、脚など一部を欠くがほぼ完形である。土坑からの出土は稀で、土馬祭祀のあり方に貴重な例を加えた。

左京三条一坊十五坪の調査（第266次）

ホテル建設に伴う事前調査で、調査区は十五坪の東北部にあたる。この坪では既に数次の発掘調査があり、奈良時代を通じて十五・十六坪は一体として利用され、公的施設の可能性が指摘されている。

盛土・水田耕土・床土・遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。主な遺構は古墳時代の竪穴住居1棟、奈良時代の掘立柱建物6棟、井戸1基などである。竪穴住居は一辺5.2～5.9mの



平城京第266次調査遺構平面図　1：300

平城京第266次調査位置図　1：2000

方形で、床面深さ20～30cmのSX6689ａと床を15cm上げたSX6689ｂの２時期があるが、中央を奈良時代の井戸SE6690で破壊されている。

十五坪の中心建物群のうち東脇殿SB5913は、桁行８間（10尺）で北妻が正殿SB5915の北廂に揃うことが確認された。SB5913の北に同時期の大型建物はなく、正殿SB5915・南殿SB5914、脇殿SB5913・5917を口字形に配し、北に北殿SB5916を独立させる配置であったことがわかる。これら中心建物群は基本的な配置は変えず掘立柱から礎石建へ造り替えたことが判明しているが、本調査ではSB5913の礎石建への造り替えは確認できなかった。

坪の東半部は中心部と様相が異なる。東区東端の掘立柱南北棟建物SB6685は桁行５間以上（柱間寸法９尺）、梁行２間以上（６尺）で北４間分を検出した。これより古い南北棟建物SB6686は桁行５間以上（6.5尺）、梁行２間以上（8.5尺）で総柱または西廂付建物である。また井戸SE6690は抜取痕跡から平城宮土器Ⅱと和銅４年の年紀木簡が出土しており、奈良時代初期に設けられ間もなく廃絶したことがわかる。このほか柱掘形の小さな建物がいくつかある。東区中央の南北棟建物SB6687は桁行５間以上（10尺）、梁行２間（８尺）で柱間の割に柱掘形が小さい。東区南西部の東西棟建物SB6688は桁行４間以上（８尺）、梁行２間（７尺）で南廂（出7.5尺）がつく。西区南半部のSB6693はおそらく東西棟で西１間分を検出したが、桁行３間以上（６尺）、梁行２間（7.5尺）と推定する。南側柱はSB6688の南廂と、棟通りは同南側柱と柱筋を揃え、同時期の可能性がある。西区南西部のSB6694はおそらく南北棟で桁行３間以上（9.5尺）、梁行２間（9.5尺）と推定される。

このように坪の東半部では建物は中小規模で、配置も整斉でなく、位置や規模を変えての建て替えが認められた。大型の井戸も検出されており、厨など付属施設群が想定されうる。中心建物群を東１坊大路に面した坪の東半でなく小路側の西半に置くことは、敷地内の利用形態を考える上で興味深い。

3　京内寺院等の調査

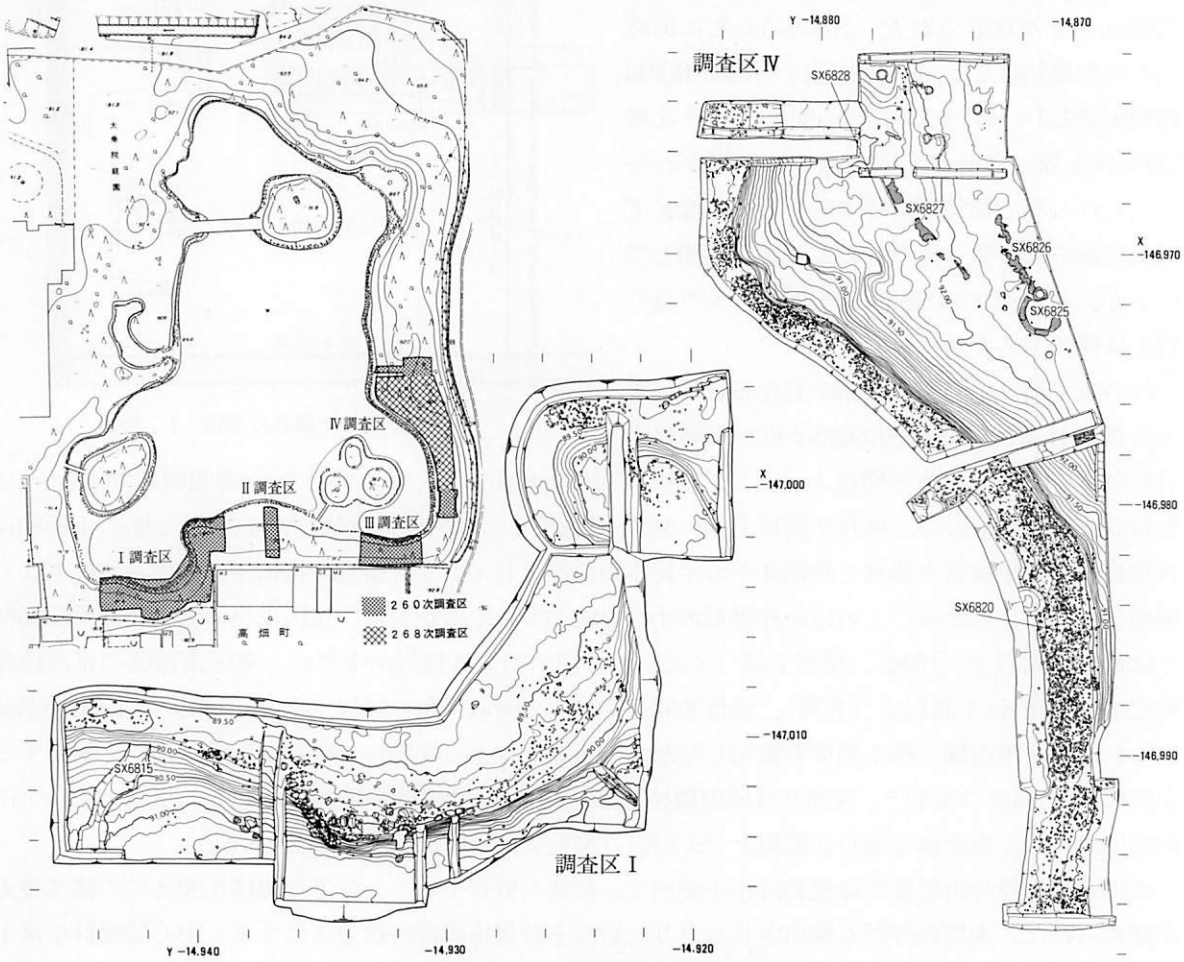
大乗院庭園の調査（第260・268次）

大乗院庭園の史跡整備のための調査である。園池南岸西端から東岸中央まで４調査区を設けた。

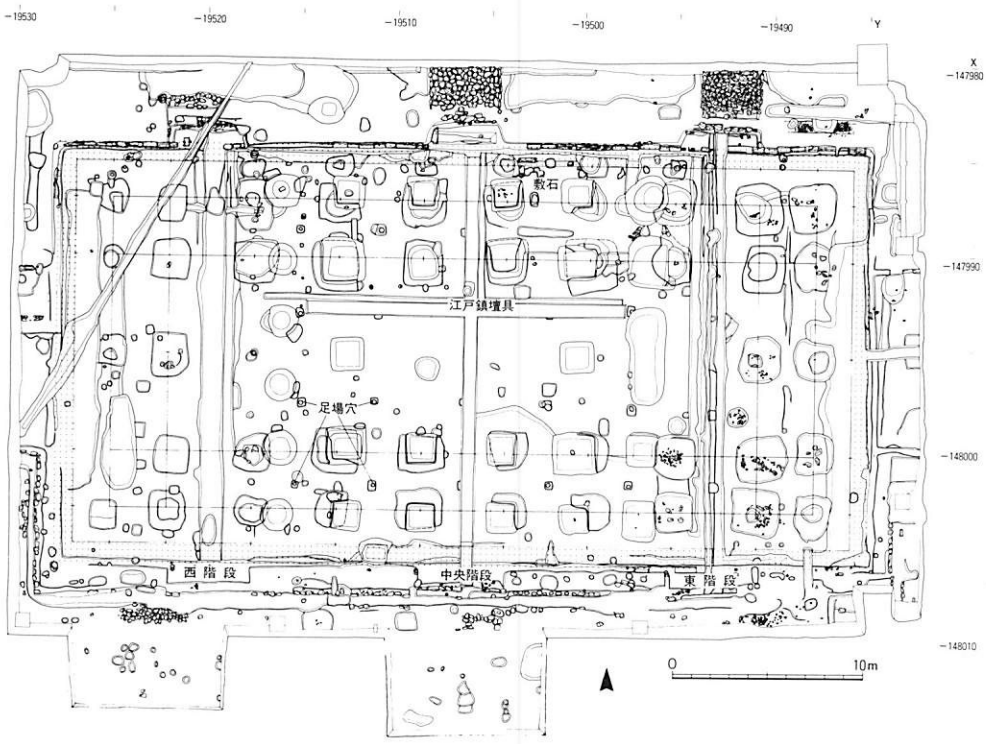
調査区Ⅰ　南岸西端のⅠ区では中世と近世の２時期の池岸を確認した。中世の池岸SG6805は陸部が急勾配で落ち込む。汀線付近は近世の池岸に攪乱されるが、礫を用いた仕上げであった可能性が大きい。近世の池岸SG6810は、中世の陸部上に造成された陸部が急に落ち込み池岸となるが、汀線付近で勾配を緩くする。南端の入江では裏込石を伴う護岸石積みSX6811も確認された。Ⅰ区東端の出島について森蘊は室町時代の南中島に由来するとみていたが（『中世庭園文化史』）、近世遺物を含むSG6810の堆積上に造成されたことが確認された。

調査区Ⅱ・Ⅲ　南岸中央のⅡ区は全域がSG6805とSG6810の池底である。南岸東のⅢ区には５～10cm大の石を貼付けた斜面があるがSG6810の堆積上で、近代の施工と考えられる。

調査区Ⅳ　池東岸南半のⅣ区では中世の池SG6805に伴うと推定される洲浜石敷SX6820がある。汀線から池底へ向かって緩やかに幅２mほどを検出した。石は形も大きさも不揃いである。断面観察によると当初は、さらに陸部側へ広がっていたらしい。園池の成立年代は不確定だが、洲浜石敷上面から10世紀末～11世紀前半の土器が出土しており、大乗院以前の弾定院の時期に遡るのかもしれない。池から東に登った陸部では叩き漆喰の園路遺構が検出された。SX6825は外径約２mのドーナツ形。これから北北西に伸びる約３m、幅50cmの帯状のSX6826。その西に断続するSX6827である。SX6827西側にガス灯の基礎があり、近代の園路と考えられるが、園路の成立は近世に遡る可能性もある。



平城京第260・268次調査遺構平面図　1：300



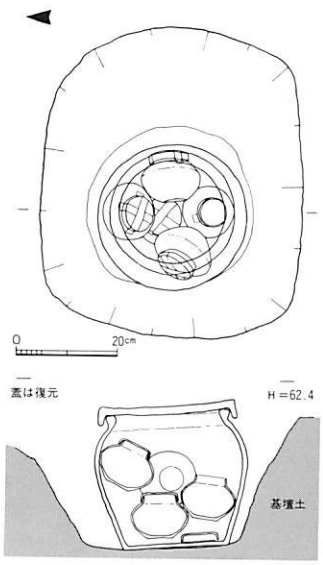
平城京第263次調査遺構平面図　1：400

薬師寺講堂の調査（第263次）

薬師寺の伽藍復興に伴う講堂再建予定地の事前調査である。薬師寺講堂については江戸末再建の講堂を避けて、北面廻廊・講堂東端部（第218次）、北面廻廊・講堂西端部（第233次）の発掘を実施しているが、再建講堂が解体された後、既発掘区を含め創建講堂の全域について発掘調査を行った。

創建講堂　講堂周辺の地山は灰白色・淡灰茶色砂質土で、講堂北辺から東辺には奈良時代以前の流路埋土がある。この上に厚20～30cmの整地を行い、基壇を版築する。版築は約30層、高さ1.2mに及ぶが、1.0mに達した段階で礎石を据え付け、さらに版築する。基壇上面近くに厚さ約2cmのベンガラ層と凝灰岩粉層があり、版築の途中で何らかの祭祀が行われた可能性がある。基壇外装は束石なしの壇正積で、凝灰岩製の地覆石と羽目石の一部が残る。地覆石は上面幅30cm前後、長さ55～110cm、厚さ25cm前後である。上面に深さ1cmほどの欠き込みを設け羽目石との仕口とする。地覆石下には平瓦2～3枚を厚さ約10cmに敷くが、中に本薬師寺所用の軒平瓦6641Hが含まれる。地覆石に改装の痕跡はない。基壇規模は東西43.3m、南北22.2mで、薬師寺の想定造営尺（1尺＝29.6cm）では東西146尺、南北75尺となる。また基壇上面の北端中央に残る凝灰岩は当初の敷石と考えられる。基壇高は敷石上端と地覆石下端で約1.0mである。基壇は版築の後に長方形に整形し、南北各3か所の階段下を含めて全周に地覆石を据える。特に南面東階段では磨滅のない基壇地覆石を確認した。北面には凝灰岩製の階段地覆が残り、北面中央では耳石も検出した。

当初礎石の据付穴および抜取穴は49か所で検出した。礎石位置が再建講堂と重複し、原位置に残る礎石はない。課題とされていた裳階の存在は北面6か所の礎石跡で裏付けられた。身舎と廂の礎石据付掘形は一辺



江戸鎮壇具出土状況　1：15

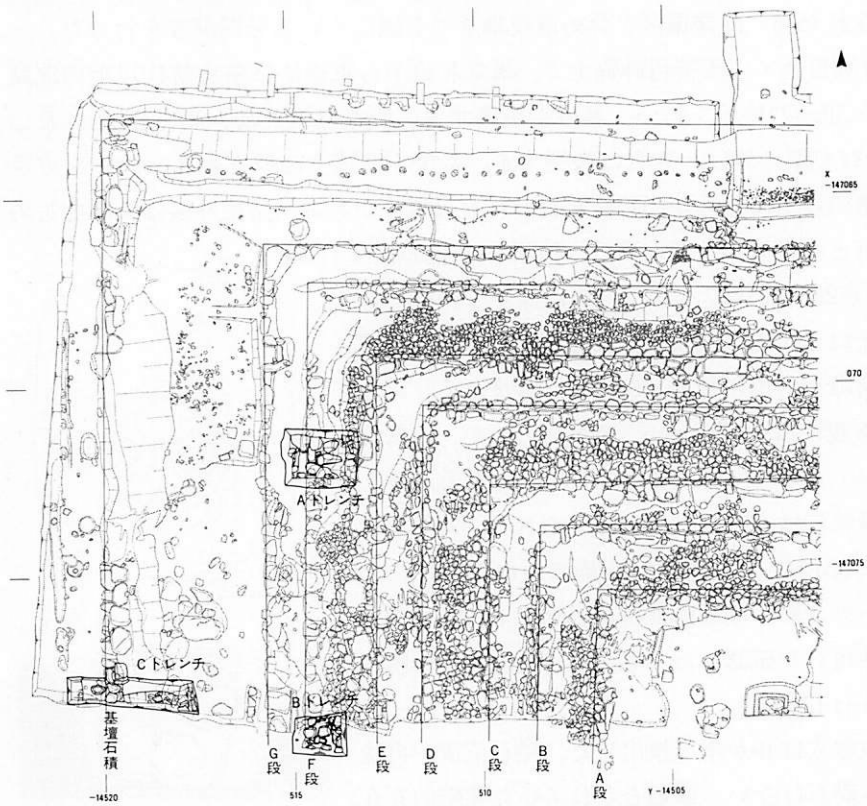
2.5m前後の隅丸方形で、版築の途中から深さ55cmを掘込む。裳階の礎石据付掘形は直径1.3cmの円形で、基壇上面から掘込み、深さは65cmある。礎石抜取穴の埋土は再建講堂基壇土と同じで、江戸末まで原位置をとどめていたと推定される。

創建講堂の平面は四面廂に裳階がつく形である。身舎は桁行7間（柱間寸法15尺）、梁行2間（17尺）、廂の出10尺である。裳階の出は6.25尺と想定されていたが6.5尺とみるべきで、建物総長は桁行138尺、梁行67尺、基壇の出は4尺となる。基壇周囲には玉石組雨落溝がめぐるが、北側階段の地覆石より上層で、時期が下ると考えられる。また北面階段から北へ延びる石敷通路が検出されたが、玉石組雨落溝と同時期であろう。

江戸末期再建講堂　再建講堂は創建以来の礎石を抜き取り、当初基壇の東、西辺を削平し、基壇上には厚さ10cmほど土を積み足す。礎石は創建講堂など複数の建物の礎石を再加工して用いている。礎石据付掘形は一辺約1.8mの方形、深さ約60cmであるが、西側柱のみ円形で直径1.8m、深さ1.1mと深い。中央北寄りには薬師三尊を安置する須弥壇を築く。須弥壇下には鎮壇具が埋納する。鎮壇具は高さ26.5cmの甕中に高さ9cmの小壺5個を中央と東西南北に配す。すべて赤膚焼で、小壺蓋に「赤膚山」の印が残り、寛政年間以前の製品と推定される。各小壺には稲籾と金箔で包んだ水晶・カリウム鉛ガラス片を入れ、紙片で十文字に封をする。南側の子壺のみ、封を解き蓋を開けて内容物を甕内にばらまいたのち、点火した木炭を投入して甕の蓋をしている。鎮壇具の土器製作年代から、須弥壇は講堂再建以前、安永年間に仮堂を設けて薬師三尊を安置した時に造られたと推測される。

頭塔の調査（第264次）

頭塔では1991年度から整備工事が続けられているが、本年度は北半部西面の基壇および塔本体石積みB～G段を解体修理した。これに伴い塔本体石積に2か所、基壇に1か所の小トレンチを設け、下層頭塔の石積、基壇構築の状況などを調査した。



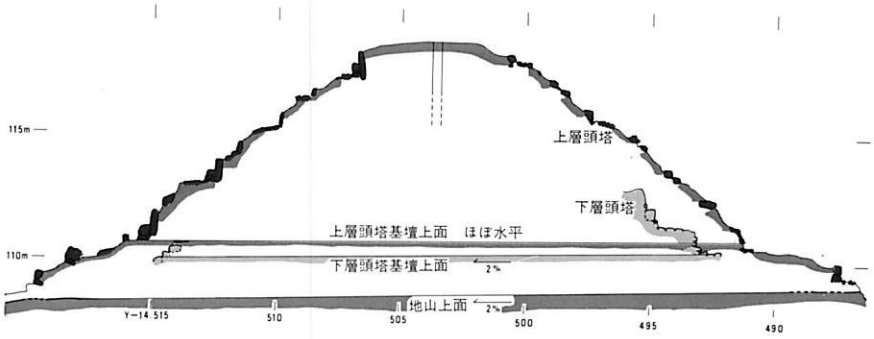
平城京第264次調査区位置図　1：200

Aトレンチ　上層最下段のG段上からえ段石積にかけて設けた。下層頭塔の第一段が上層G段から約1.5m内側で検出された。下層第一段には東面と同様、前面に2段の階段状石積を持つ。基壇上面石敷の確認にはいたらなかった。

Bトレンチ　西面上層G段中央の石仏裏側の小トレンチ。下層頭塔と考えられる石積を検出したが、東面中央石仏裏側が仏龕状であるのに対し、垂直壁となっていた。また石積下端はAトレンチで想定される基壇上面高より約1m高い。この石積は下層頭塔石積ではな

く、上層頭塔の築成過程で築かれた土止めの可能性が高い。

Cトレンチ　西面基壇中央に設けた。西面基壇石積が階段状であることは、第199次調査で明らかになっていたが、上層に伴うか下層まで遡るかは不明であった。石積基底石は地山から得た赤褐色砂礫土の約25cm厚の整地土上にのる。残存石から復原される基壇上面の標高からみて下層頭塔に遡ると判断した。基壇最下層石積の裏込土から出土した須恵器杯BⅢは、須恵器杯Ⅰ～Ⅵ群のいずれにも属さないが、形態的に奈良時代後半～末と推定され、下層基壇の造成時期と矛盾しない。



頭塔東西断面図　1：300

下層頭塔の規模　Aトレンチで下層石積第一段西面を確認したことから、下層頭塔の第一段の東西幅は約21m（71小尺）であることが確認された。上層塔本体第一段は東西幅24.2m（82小尺）であるから、作り替えの際11尺大きくしている。また東高西低の原地形を、東は削平し、西には盛土して、2％弱の西下がり勾配をもつ平坦面を造成していた。下層基壇の上面も同じ勾配をもっており、上層基壇の築成にあたって水平に直したのであろう。

（長尾　充）

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積(m²)	備　考	調査要因
6AAD-P・0 6ALP-K 6ALQ-J	平城宮　第250次	95.4.7-95.7.7.	1,800	造酒司	計画調査
6AAD-N・O 6ALQ-I・J	平城宮　第259次	95.7.3.-95.9.29.	2,000	造酒司・宮内道路	計画調査
6AAV-M	平城宮　第261次	95.10.2.-96.1.19.	2,100	二次町道院東第六堂	計画調査
6ABP-I	平城宮　第262次	95.9.1.-95.9.5.	12	第一次大極殿	地盤調査
6AAV-M 6AAW-L・K	平城宮　第265次	96.1.19.-96.5.13.	2,030	第二次朝堂院南門	計画調査
6AAN-C	平城宮　第258-11次	96.3.19.-96.3.26.	23	内裏北外郭北方	個人住宅建設
6AFJ-O	平城京　第258-2次	95.5.16.-95.6.9.	250	左京三条一坊七坪	駐車場造成
6ASB-B	平城京　第258-3次	95.8.22.-95.8.31.	46	市庭古墳北東部	個人住宅建設
6AFC-G	平城京　第258-4次	95.9.20.-95.9.28.	42	左京一条二坊十坪	個人住宅建設
6AFJ-N	平城京　第258-5次	95.10.24.-95.11.10.	160	左京三条一坊七坪	ガソリンスタンド建設
6AFC-F	平城京　第258-6次	95.11.14.-95.11.22.	30	左京一条二坊七坪	個人住宅建設
6ASB-B	平城京　第258-7次	95.12.4.-95.12.8.	15	市庭古墳周濠	個人住宅建設
6AFJ-H	平城京　第258-8次	96.1.9.-96.1.19.	30	左京三条一坊坊間路	個人住宅建設
6AFJ-Q	平城京　第259-9次	96.1.17.-96.1.26.	42	左京三条一坊八坪	個人住宅建設
6AGF-P	平城京　第258-10次	96.2.13.-96.3.15.	45	左京三条一坊十坪	個人倉庫建設
6AFJ-G	平城京　第266次	96.1.23.-96.3.15.	395	左京三条一坊十五坪	ホテル建設
6AFC-G・H	平城京　立会	96.2.15.-96.2.20.		木取山古墳周辺	水路改修
6BFK-I	平城京　第258-1次	95.4.17.-95.4.19.	20	法華寺旧境内	個人住宅建設
6BGN-B	平城京　第260次	95.7.6.-95.9.8.	330	大乗院庭園	史跡整備
6BYS-L	平城京　第263次	95.10.2.-96.1.25.	1,480	薬師寺講堂	伽藍復興
6BZT-A	平城京　第264次	95.10.16.-96.3.29.	8	頭塔	史跡整備
6BGN-B	平城京　第268次	96.2.26.-96.3.21.	210	大乗院庭園	史跡整備

1995年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧